天下に挑む

反逆者小説集

時代小説ベスト・セレクション 8

講談社

時代小説ベスト・セレクション 8

天下に挑む

反逆者小説集

時代小説ベスト・セレクション　第八巻
天下に挑む　反逆者小説集
一九九四年一〇月二四日　第一刷発行
著　者　海音寺潮五郎　他
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
郵便番号　一一二―〇一
東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　編集部（〇三）五三九五―三五〇五
販売部（〇三）五三九五―三六二二
製作部（〇三）五三九五―三六一五
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
©Chogoro Kaionji and others 1994,
Printed in Japan
ISBN 4-06-254908-5（文２）

天下に挑む ◆ 目次

平将門　海音寺潮五郎　8
北上燃ゆ・陸奥の黄金　安部龍太郎　38
信貴山落日　永井路子　62
神の子の首　南條範夫　80
由井正雪の最期　武田泰淳　116
原田甲斐の子　長谷川伸　130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一刀斎忠臣蔵異聞　五味康祐　148
御落胤　柴田錬三郎　164
失望した平八郎　直木三十五　180
桐野利秋　尾崎士郎　196
編者解説　縄田一男　220

装画　村上　豊
装丁　熊谷博人

天下に挑む

〔反逆者小説集〕

海音寺潮五郎

平将門（たいらのまさかど）

一

桓武天皇の皇子葛原親王の孫高望王は臣籍に下って平姓を賜わり、上総介となって関東に下って来た。大日本史の「表」の国郡司上総の部に、これは寛平二年（八九〇）五月のことであったとある。すなわち宇多天皇の治世であり、藤原基経が最初の関白として威権朝廷を圧していた頃である。高望王はこの任命をかちとるために、基経の許にお百度をふみ、さんざんきげんをとり、多分名簿をいれて家人となりまでしたことであろう。藤原北家でも良房の系統に権勢が集まり、皇族でもこの系統と関係のない人は運命のひらけようのなかった時代なのである。

高望王は上総介に在任中に相当な私領地をこしらえた。大体この時代から、中央では芽の出そうにない下級公家が地方官となって地方に下って私領地を営み、任期がおわるとそこに土着して地方豪族となることがはやっているが、高望王もこのはやりに従ったのである。これらの私領地作りにはさまざまな方法がある。荒蕪地や原野の開墾が最も普通だが、買収、受贈、婿入りによる取得などはノーマルな方法で、荒っぽいのもある。公地のごまかし、官権をかさに着ての横奪等々々だ。高望王もきっといろいろな方法を活用して手に入れたのであろう。彼の子供らが散らばって繁栄しているところを見ると、その私領地は上総・下総・常陸・武蔵等の諸国に散在していたのであろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う。

こうして高望王は関東の在地地主となったわけだが、こういう在地地主を、当時のことばでは住人または武士といった。

ここに武士ということばが出て来たが、日本における武士の発生、発生の原因、発生当時の武士がどんなものであったか等については、読者はすでに十分に承知のことであろうが、初心の読者のために簡単に説明しておきたい。

大宝令には軍団の規定があって、常備の軍隊がおかれることになっていたが、平安朝の初期、桓武天皇の延暦年間（元年七八二）に経済上の理由で廃止され、日本には常備軍はないことになった。しかし、軍備は一面では警察力である。微力な盗賊の追捕なら検非違使で十分に間に合うが、武装した大集団の強盗は手におえない。国民は必要上から、自警手段を講じなければならなくなった。寺院の僧兵、神社の武装神人はこうして出来たが、同時に在地地主らは一族の末家の者を家ノ子とし、私領地の民の中で強健多力の者をえらんで郎党とし、武技を習わせて従えた。これが武士の起原である。つまり、この時代の武士とは、在地地主とその家ノ子・郎党らとを、武力具有の面から呼んでいる名にすぎない。だから、その本質は地主、自作農、小作農で、りっぱに生産人だったのである。後世の戦国中期から以後江戸終末期に至るまでの武士が純然たる消費人であったのとは大違いなのである。

武士の発生はどこが先ということはなく、大体全国一斉であったが、それでも坂東はその本場とされた。これは天皇国家の発展史に関係がある。天皇国家の勢力は近畿地方から、先ず西にひろが

り、東国の征服はずいぶんおくれた。白河関以北は鎌倉時代初期に平泉藤原氏がほろぼされるまでは、厳格には天皇国家の版図にはなっていず、蝦夷人の王国であった。平安朝初期に坂上田村麻呂の征伐などがあって、一応圧服したようではあるが、その後も叛服常なく、ついには平泉藤原氏のような強大な支配者が出て三代にわたって栄えたりなどしているのだから、この大戦前の満洲ほどにも行っていなかったといえる。さしずめ、陸奥守は満洲総督、鎮守府将軍は関東軍司令官くらいのものであったろう。

坂東地方はこの地と境を接している辺境地帯である。蝦夷人との絶えざる紛擾交戦の状態があったろう。また当時の陸奥や出羽にはひんぴんとして叛乱がおこった。前九年役や後三年役などは特に大きいもので、記録にも載らないさわぎは無数にあったに違いない。さわぎがおこれば、朝廷では征夷将軍を派遣することになるが、軍隊のない政府だから、将軍は従者数名をひきいただけで坂東に来て、兵を徴募し、これをひきいて現地に乗りこむのである。坂東人はここでも戦闘馴れして来るわけである。

このようにして坂東人は勇健となり、武技に秀で、最も理想的な武人に鍛え上げられ、平安朝末期から鎌倉時代を通じて、南北朝の初期頃まで、関八州の兵をもって天下の兵に敵することが出来るとまで言われた。

われわれは西部劇映画で、西部のカウ・ボーイらに、馬術の名手で、ピストルの名手で、勇敢で男を磨く気性の者の多いことを見るが、平安朝時代の坂東の男らはあれと同じであったと考えてよい。屈竟の荒馬乗りで、矢つぎ早やの強弓引き

で、廉恥心旺盛で、勇敢な男らがうじゃうじゃといるところ、それが坂東だったのである。

開拓時代の西部には牧場が多かったのだが、平安朝初期から中期頃までの坂東にも牧場が多かった。もっとも馬の牧場である。一体、牧場は人間のあまりいない片田舎に営むよりほかのないものだ。日本でも聖徳太子の頃は今の京都の伏見あたりが聖徳太子の牧場になっている。中央のひらけ方が地方にひろがって行くにつれて、牧場の位置は遠くなり、この時代には坂東に移った。さらに進むと、奥羽に移り、今日では北海道が本場だ。この時代は坂東が本場だったのである。この点もこの時代の坂東が開拓時代の西部に似ていてまことに興味が深いが、この事実は当時の坂東人が馬とともに生活し、従って恐ろしく馬術が巧みであった原因となるものであろう。

最近の歴史学者らは、将門の乱のおこる数十年前に関東に僦馬の党というのがあって猖獗をきわめたといっている。僦馬は読んで字のごとく「馬をやとう」である。その頃、関東の豪族らには官道往来用として馬を貸す業をいとなんでいる者が少くなかったが、この者共がいつか官馬を盗むことをはじめ、たがいに連絡をとって、東山道で盗んだ馬は東海道で使い、東海道で盗んだ馬は東山道で使うという具合にしたので、官では取りおさえる証拠がなくて弱ったというのである。これは将門の乱のはじまる以前の関東豪族らの一生態であったが、これが将門の乱のおこる一背景をなしているというのが歴史学者らの推察である。ここでも、われわれは西部劇における馬盗人や牛泥棒、あるいは駅馬車強盗と同じ現象を見るのである。この時代の関東はいろいろな点において、開

拓時代の西部に実によく似ているのである。

二

さて、高望王は地方官としての任期満ちた後も京に帰らず、関東に土着し、その子供らもそれぞれの場所におちついた。高望王の子は六人いたようである。国香、良兼、良将、良繇、良文、良正。国香は常陸大掾となって常陸の石田（今の茨城県真壁郡明野村東石田）に住み、良兼は上総介（『将門記』には下総介とあるが、記事全体から判断して上総介の誤りのようだ）となって今の千葉県山武郡横芝町屋形に住み、良将は鎮守府将軍、下総守となって下総国豊田郡国生（今の向石下）に住み、良繇は不明、良文は村岡五郎と称し、武蔵大掾となって今の熊谷市村岡に住み、良正は常陸六郎と称して筑波郡水守に住み、いずれも土地の豪族として威勢があった。桓武四世の孫とはいえ、北家藤原氏と血縁の関係がないのだから、京にいてはまるで冴えないのだが、草深い地方に落ちてくれば、帝系を去ること遠からぬ高貴な血統というので、十分に重んぜられたのである。

将門は三男良将の子である。通称は小次郎。小次郎というのは、太郎、次郎などと同様に兄弟の順序を示す名称だ。小次郎とは三男でありながら次男のあつかいをする子という意味だ。だから、彼には二人の兄がいたはずであるが、これは早く死んだのであろう。聞こえるところがない。いつ生まれたかも不明である。幸田露伴翁は何によられたか知らないが、菅公の死んだ年である延喜三年（九〇三）に生まれたと、その著『平将門』に書いておられるが、これは早すぎるようにぼくに、

は思われる。延喜三年では高望王が上総介となって関東に来てから十三年しか経っていない。三男である良将が三人目の子を生むには、早すぎる。ぼくは十年くらい引下げたいのである。十年引きさげると、延喜十三年の生まれとなる。

彼は早く父に死別したらしい。これも見当だけのことだが、十五、六の頃だったのではないだろうか。この頃の彼の住所は、父譲りの豊田である。豊田の名称は現在では茨城県結城郡石下町の一字に局限されてしまったが、この時代には一郡の名称である。現在の鬼怒川の西岸向石下に、将門の邸址がのこっている。今では何とやらいう寺になっているが、この寺をとり巻く杉林の中に濠の痕跡が歴々としてのこっている。秋になると銀杏の実の累々となる巨大な公孫樹が庭にある寺である。父が死んで当主となって間もなく、京に上ったらしい。官位をもらうためである。地方の住人らがこの年頃になると京上りして、羽ぶりのよい公家の家に家人として奉公し、その推薦で六衛府や馬寮に仕官し、数年して左・右衛門尉、左・右兵衛尉、左・右馬允などの官とそれに付随する正七位上くらいの位階をもらって帰国するのは、当時は普通の習慣であった。このような官位を持っていると、国で住人らの間で羽ぶりがきいた。国府の役人らも鄭重に待遇した。もしその官位が同族中で最高のものであれば、同族の上に立つ長者ともなれた。

京では、北家藤原氏の長者忠平の家人となった。この時代、忠平は左大臣であり、二、三年後には摂政となり、最後には太政大臣となった人である。祖父高望王は忠平の父基経の家人となって勤仕したと思われるのだが、基経は高望王の関東

下国の翌年に死亡しているから、将門の父良将は基経の長男時平あたりに家人奉公して、六衛府の官人となり、だんだんごきげんを取って、鎮守府将軍を射あてたのではなかろうか。こうした猟官運動なくしては、地方の武士らが官職にありつくことはなかった時代なのである。

将門が何年滞京したか、わからないが、多分三、四年のものであったろう。平氏系図に「滝口小次郎」とあるから、在京中に滝口伺候の侍になったようである。滝口というのは清涼殿の東北方、御溝水の落ちるところで、ここに禁中の警備や雑役に従う者の詰所があり、これを滝口所といった。滝口の侍とはここに詰める侍のことだ。微かな役だが、単に宮中に勤仕するというだけでもありがたいこととした時代だから、この時代の地方武人は名誉として、よく誇らしげに「滝口ノなにがし」と自ら名のっている。

ずっと後世の書物だが『神皇正統記』に、将門が検非違使たらんことを希望したのに、忠平が推薦してくれなかったので、怨みをふくんで帰国し、ついに叛逆したとある。ここの検非違使は検非違使尉であるから、旧軍隊なら少尉か大尉、警察官なら署長くらいの格だ。それにしてもらえなかったからとて、関東独立国をつくろうと考えたとは、ずいぶん不釣合な話だが、これが朝廷に愛想をつかす動機となったというなら、うなずけないことはない。

将門が後年叛逆に踏切ってから、旧主忠平に出した手紙が『将門記』に出ているが、その中にこうある。

「将門、天の与ふるところ、既に武芸にあり。思惟するに、等輩誰か将門に比せんや」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com